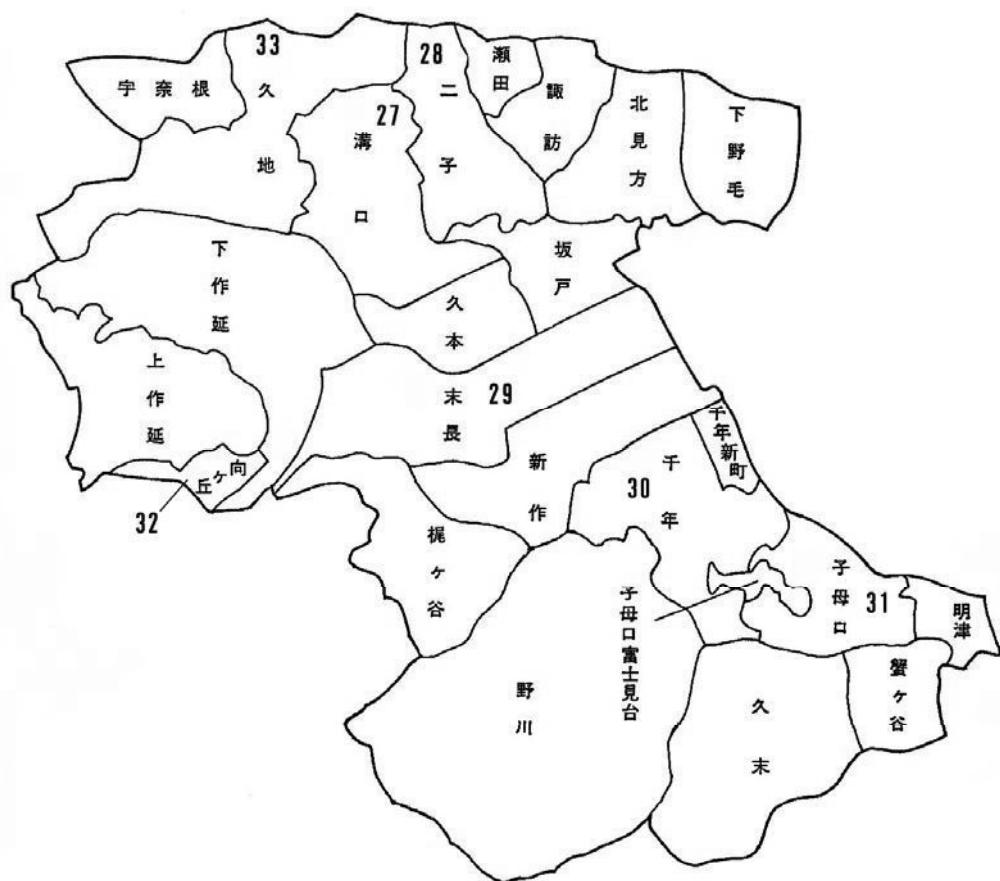


高津区



高津区のなりたち

古代から橘樹郡(たちばなぐん)に属していた地域です。ヤマトタケルの東征説話に関連したオトタチバナ姫の話が伝えられ、また、その話に関連した橘樹神社や子母口富士見台古墳が存在します。奈良時代の橘樹郡の郡衙(ぐんが=郡の役所)の跡と思われる遺跡が発掘されており、そのそばに奈良時代創建という影向寺(ようごうじ)が存在します。こういうことから、この地域が橘樹郡の中心的な所であつただろうと考えられます。

江戸時代のこの地域には、19村がありました。北見方・諏訪河原・坂戸・二子・溝の口・久地・上作延・下作延・久本・末長・新作・清沢・岩川・子母口・明津・蟹ヶ谷・久末・野川・梶ヶ谷の村々です。

明治22年の市制町村制施行でこれらの村は整理統合されました。

溝の口を中心にして二子・久本・坂戸・諏訪河原・北見方・久地・下作延の8村が合併して、高津村を形成しました。どうして高津と名のったかは定かではありません。

末長・新作・千年(清沢と岩川が合併)・子母口・明津・蟹ヶ谷・久末の7村が合併して、橘村を形成しました。この名前は橘樹神社があることによりますが、ここが橘樹郡の中心であるという意識が上台にあったものと思われます。野川と梶ヶ谷は南の宮前村に、上作延は西の向丘村に入りました。

明治45年に府県境変更があり、東京側の下野毛・瀬田・宇奈根の各一部が高津村に編入されました。昭和2年に諏訪河原が諏訪と改称しました。昭和3年に高津村は町制をしき高津町になりました。

昭和12年に高津町と橘村が川崎市に編入され、旧村がそれぞれ川崎市の大字となりました。翌13年に向丘村と宮前村が川崎市に編入されました。上作延や梶ヶ谷・野川も川崎市の大字となりました。

昭和47年川崎市が区制をしき、高津区が出来ました。今までここにあがっていた村々の地域がこの新しい高津区の中に入ったわけです。

昭和から平成にかけて進められている住居表示により、新しい町名ができたり、丁目がつけられたりして現在に至っています。

高い津とはどういうこと？

高津(TAKATSU)

○場所

東は中原区・西は多摩区と宮前区・南は横浜市港北区に隣り合います。北は多摩川をはさんで東京都世田谷区にむかいあっています。

区の東側半分は平地で、古い多摩川がはこんできた土砂がつもった所です。西半分は台地や丘になっています。そこへ小さな谷間がたくさんあります。そういう谷間のことを、このあたりでは「谷戸」と呼んでいます。

○由来

地名の由来は定かではありません。

明治 22 年に溝口周辺の 8 村が合併して、新しい大きな村をつくりました。そのときの新しい村の名前として採用されたのが、「高津村」という名前だったのです。しかし、そのときの記録が残っていないため、なぜ「高津」としたのかは、残念ながらわからなくなってしまいました。古くは、このあたりの風光が、仁徳天皇の大坂高津宮あたりの景色と似ているから「高津」としたと言われていました。

また、別の説があります。「高」は川の上流をさし、「津」は港を意味するととらえて、「高津」というのは「多摩川のやや上流に位置する川港」という地域の特性から名づけられたとするものです。

現在、高津という町名はありません。区名のほかは駅名や地域名として使われています。

ミゾって何をいうの？

溝の口(MIZONOKUTI)

○場所

東は二子・西は久地・南は久本と下作延に隣接します。国木田独歩は『忘れえぬ人々』の書き出しに、「多摩川の二子の渡しをわたってすこしばかり行くと溝ノ口という宿場がある」と書いていますが、多摩川の流れに程近い平地の町です。

中世には「溝之口」、江戸時代には「溝の口」と表記されていました。

○由来

地名の由来は定かではありません。

ミゾというのは、丘の下にきざまれた小さな谷を呼ぶのが一般的です。相模原台地の西側の丘の下の鳩川・姥川の谷は、ミゾと呼ばれ、上溝・下溝の地名があります。そういうことから、溝口のミゾは、平瀬川のつくる小さな谷をさすのではないかと思われるのです。下作延まで丘陵の間の谷間を流れてきた平瀬川が、この地に来て、広大な多摩川の低地に出ます。その谷の出入口にあたることから「ミゾの口」と呼ばれるようになったと思われます。現在は「溝口」で、これで「みぞのくち」と読ませています。

ちなみに、JR南武線の駅名は「武藏溝ノ口」・東急田園都市線の駅名は「溝の口」です。

エピソード

江戸時代に入って大山街道が通り、そのとき溝口に宿場が設置され、以来、宿場町として栄えてきました。江戸中期以降、大山参りの旅人でにぎわうほか、伊豆・相模方面から江戸への物資の輸送で繁盛しました。江戸から多摩川のほとりや多摩の丘べの風物

を楽しみに訪れる文化人もふえて、地域をえがいた絵や詩がつくられました。

街道沿いの村は、京都寄りから上宿・中宿・下宿の三つに分けられ、旅籠(はたご)や旅人用の商品の店がびっしりと立ち並びました。



大山街道が二ヶ領用水をまたぐ大石橋

フタコつて双子のこと?

二子(ふたご)(FUTAGO)

○場所

溝口の東につづく地域で、北は多摩川にのぞむ「多摩川のほとりの町」です。東は瀬田・諏訪に、南東は北見方に、南は坂戸に隣り合っています。南側を二ヶ領用水が流れ、地域の中央を東急田園都市線が南北に通り、「二子新地」(ふたごしんち)・「高津」の二つの駅があります。

○由来

江戸時代には二子村とよばれていた地域で、村名は村内にある「二子塚」に由来しているといわれています。村の東南部に古代（5～6世紀）の円い古墳が二つ並んでいたそうです。昔このあたりに有力な豪族がいたことがうかがえます。

二つ塚が並んでいるので「二子塚」と土地の人は云い、それがある村ということで「二子村」という村名で呼ばれたのでしょう。この塚は、開発の波のなかで消滅してしまい、現在は住宅地になっています。

読み方は「フタゴ」が正しく、「フタコ」はまちがいです。「フタコ」の読みが世にひろまったのは、昔、玉川電気鉄道が、二子の渡しの対岸に遊園地をつくり、駅名もふくめて「二子玉川遊園」としたのが始まりです。

エピソード

江戸時代初期、矢倉沢往還（大山街道）が通り、隣町の溝口が宿場に指定され、やや遅れて二子も宿場に指定されました。「二子・溝の口宿」になったわけです。ひと月のあいだを20日と10日に分け、分担して宿場の仕事をすすめました。

多摩川の渡しもこの宿の担当で、そのため渡し場は「二子の渡し」と呼ばれました。明治になり此処に橋を架けるはなしはじまり、大正14年（1925年）に橋は完成、「二子橋」と命名されました。橋の近くに二子神社があり、ここには岡本かの子の文学碑があります。



岡本かの子碑・太郎「誇り」

すえ長いってどういいうこと？

末長(SUENAGA)

○ 場所

区の中央部に位置し、北隣りは久本、北東は坂戸です。西は下作延、南は新作、東は中原区新城に隣接します。地域の西侧は丘陵部で、いくつもの谷戸がはいりこんでいます。東側は古い多摩川がつくった沖積低地で、水田地帯になっていました。古い地名で、平安時代末に「末長郷」の名があらわれています。

○ 由来

地名の由来は定かではありません。

鎌倉時代、川崎中部に稻毛本荘という荘園（貴族の私有地、地方の武士が管理）があり、その周辺に新荘も開発されました。その稻毛の新荘のさらに周辺に、土地の有力な農民が新しい開墾地をひろげていきます。その際、その土地に自分の権利を主張して自分の名前をつけ、そういう土地を「名」といいます。「名」として自分の名前をつけるかわりに、「おめでたい地名」をつけることも多かったのです。

末長は、「自分の土地が末永く栄えますように」との願いをこめてつけられた吉祥地名（おめでたい地名）と考えられます。近くにある久本・久末なども同じような地名と思われます。

エピソード

南どなりの新作との境に小高谷戸(おだかやと)という地名があります。古代の東海道の橋樹郡の駅家(うまや)で小高駅というのが史書にあり、その小高駅がこの辺りに置かれていたらしいと推定されています。歴史的に重要な土地だとわかります。

土地の言い伝えでは、八幡太郎義家(はちまんたろうよしいえ)が、平安時代後期の後三年の役(ごさんねんのえき)の出征の帰り道に通りかかり、台地の上で奇妙な石を発見し、これに弓矢を納めて武運を祈り、同時に民の末長く栄えますようにと祈って祠(ほこら)をたて、これが末長の地名由来と言われてきました。

○ 場所

区の東はしの中央部にあり、台地がほぼ半分を占める地域です。北西は新作、東は子母口、南は久末と野川に隣接しています。

江戸時代、この地は低地側に岩川村、台地側に清沢村という二つの村があったのですが、明治8年にその2村が合併し「千歳村」という新しい村をつくりました。明治11年に、そのチトセの漢字表記を改めて「千年村」としたのです。現在の町名は、その村名をひき継いだものです。

○ 由来

チトセの由来は、「村と村人の生活が千年も万年も未永く栄えますように」との願いからつけられた村名です。旧村名の「岩川」はこここの低地を西から東南へ流れている江川のことを古くは岩川と呼んでおり、「岩川に沿う地」ということだと思われます。また「清沢」は、多くの谷戸の奥からの湧水の清冽(せいれい)なことから「清い沢水の流れるところ」ということだと思われます。

エピソード

中原街道は、江戸時代初期に将軍の旅行や鷹狩りなどに利用されるなど、重要な役割りを果たしましたが、東海道が開かれて以後はその補助的な街道となり、重要さはやや薄れました。しかし、相模と江戸をつなぐ物資のルートとしては、かなり大事な役割をもちつづけました。その中原街道が、東寄りを通過しています。

街道が、台地にかかるところが蟻山坂(ありやまざか)です。現在はとなりに新道がつくられて、切通しで傾斜はだいぶゆるやかになっていますが、昔はかなり急坂で荷車などの通行に苦労したといいます。今でも旧道の一部が残っていて、昔の面影を伝えています。



蟻山坂（右手が旧道）

ます。

この坂の西側が蟻山台です。その向こうが伊勢山台です。ここで古代の橘樹郡の郡役所の跡と推定される遺跡が発見されています。正倉（しょうそう＝役所の倉庫）と思われる建物群の跡も発掘されています。ここは古代の川崎の中心地だったと云えます。

シボのほんとの意味は……

子母口 (SIBOKUTI)

○ 場所

宮前区の東南部にあり、西は千年、北は江川をはさんで中原区下小田中、東は明津、南は矢上川をはさんで久末と蟹ヶ谷に隣合っています。地域の大部分は、矢上川と江川にはさまれた沖積低地ですが、北西部に台地とそれに続く斜面があります。

○ 由来

地名の由来は定かではありません。表記は、中世には「瀧口」と書かれていましたが、江戸時代に入ると「子母口」と書かれるようになりました。

地名の由来については、いくつかの説があります。

1、シブクチ説 シボはシブの変化とみる考え方です。シブは渋で、金渋つまり金属分の多い水をいいます。クチは出口の口です。そうすると、渋口とは「鉄分の多い水流の流れ出る口」という意味になります。矢上川の渋水が、谷間から広大な多摩川低地へ流れ出る口ということになるのです。

2、シボクチ説 クチを出入り口とみるのは同じです。シボは「しばむ」という意味の言葉ととらえます。しづんだ地形=谷ということで、これを矢上川の谷とみます。ここから奥は丘陵地となるので、「矢上川の谷の口」ということがシボクチという地名になるという説です。

エピソード

南部にある「子母口貝塚」は、縄文早期の遺跡として考古学上で非常に重要な所とされています。ここから掘り出された土器は「子母口式」とよばれて、土器の古さをきめる基準になっています。現在は、近くに貝塚公園があるだけです。



橘樹神社

地域の中央、いちばん高いところに「子母口富士見台古墳」があります。直径 17.5m の円い形の古墳です。ヤマトタケルのお妃(きさき)オトタチバナヒメが東の海で亡くなったあと、その櫛が当地に流れ着いたものがこの古墳に葬られていると伝えられています。この古墳の南に橘樹神社があり、祭神はヤマトタケルとオトタチバナで、同様の伝えが語り継がれています。

向かいって何のむかい？

向ヶ丘【MUKAIGAOKA】

○場所

区の西のはし、東急田園都市線の北側に位置する丘陵地帯の町です。北隣りは下作延と末長で、東隣りは末長と新作です。西隣りは宮前区の宮崎になります。

この町名は、明治 22 年の市制町村制施行のときに、上作延、長尾、平、菅生の 4 村が合併し「向丘村」ができました。旧上作延村の字南原という所になります。

○由来

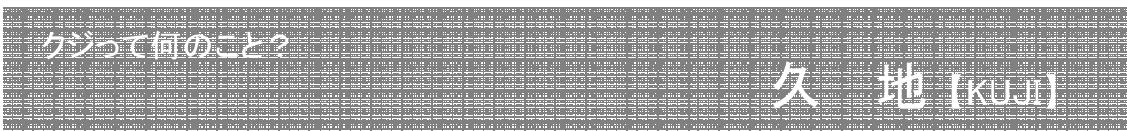
明治 22 年に向丘村ができたとき、もとにしたのは歌枕（歌の題材としての名所）の「向いの岡」だったということです。多摩丘陵は奈良時代「多摩の横山」とよばれて歌にもよまれました。平安時代には「向いの岡」として歌枕になりました。武蔵野から見て、多摩川の向かいに見える岡ということです。武蔵野も多摩川も歌枕になっていました。その古典を下敷きにしたうえで、合併した 4 村が、平瀬川をはさんでお互いに向かい合っている丘の村であったことをもとにして「向丘村」と命名したとのことです。

太平洋戦争時代、この辺りは陸軍に広く接收されて軍用地にされてしまいました。東部 62 部隊の構内と演習地になっていたのです。戦後、民有地にもどり、昭和 26 年に町名がつけられました。もと宮前地区だった所に「宮崎」、もと向丘地区だった所には「向ヶ丘」の名がつけされました。

現在「向ヶ丘 1~6 丁目」の町が存在しています。「向ヶ丘」と書いて「むこうがおか」と呼ぶようになったのは、昭和 2 年に小田急電鉄が向丘村長尾の地に「向ヶ丘遊園地」をつくり、「むこうがおか」とよぶようになってからのことです。もとは「むかいかがおか」です。

エピソード

この台地上のほぼ中央の向原に、バス停「しばられ松」があります。ここに聖松という松の大樹がありました。木の下には聖社という小さな祠（ほこら）がありました。村人がここにお参りするとき、願い事をとなえながら、松の木の幹に縄を縛りつけたそうです。願い事がかなえば、その縄をほどきました。昔は「縛り松」といっていたものが、いつの頃からか「縛られ松」と呼ばれるようになったということです。



○ 場所



新平瀬川と二ヶ領用水の合流点

区の西北部に位置し、北は宇奈根に接し、多摩川をへだてて世田谷区鎌田に向かい合っています。西は堰と宿河原につづき、南は下作延、南東は溝口と二子に隣接します。地域の北側の多摩川寄りは低く平らな土地で、南側は、多摩丘陵の末端の丘が続きます。地域の南方を二ヶ領用水が西から東へ流れ、また、改修によって流路を変えた新平瀬川が地域の中央を多摩川に向って流れています。

○ 由来

地名の由来は定かではありません。「クジ」という言葉は、「クズれる」(崩れる)とか、「クジる」(抉る)という言葉と同じ意味をもつ語と考えられます。「急な、崩れやすい崖」につけられる意味で、全国にある地名です。当地は南側に丘陵をもち、その北側は多摩川に臨んで急な崖になっています。その急な崖が、北西から南東に向けて続いている地形が特色になっているのです。この「抉られて、崩されたような急な崖」という地形の特色による地名であると思われます。表記の異なる「久慈」という地名が各地にありますが、これも同じ語源からのものでしょう。

エピソード

久地神社の裏山一帯は、大明神山と呼ばれていました。この山の北側の下に、昔は「氷場」があったそうです。寒い冬の季節、日蔭の池の水を凍らせておいて切り出し、山裾(やまずそ)に作った氷室に貯蔵しておき、夏場になって出荷したそうです。

大明神山から溝の口の七面山へつなぐ丘陵は、全体「久地山」とよばれました。昭和にはいって、久地山一帯を玉川電気鉄道の会社所有となり、当時の玉川電気鉄道の社長の名をとって、この一帯の丘は「津田山」とよばれました。それが後に地名となり駅名になりました。久地で有名なのは「円筒分水」です。二ヶ領用水の灌漑用の水を、



円筒分水

ここより下流の各地域に分ける施設です。地域の流域面積の広さに応じて、その比率で分水するうまい仕掛けでつくられています。昭和 16 年に造られたもので、その後全国の模範とされてこの様式がひろまつたそうです。